

たましいは生きています

小川 未明

昔の人は、月日を流れる水にたとえました。まことに、ひとときもとどまることなく、いずくへか去ってしまうものです。そして、その間に人々は、喜んだり、悲しんだりするが、真剣なのは、そのときだけであって、やがて、そのことも忘れてしまいます。

この話も、後になれば、迷信としか、考えられなくなる時があるでしょう。

*

私の兄は、音楽が好きで、自分でもハーモニカを吹きました。海辺へ行っては砂の上へ腰を下ろして、緑色の泡たちかえる海原を眺めながら、心ゆくまで鳴らしたものでした。無心で吹くこともあったし、また、果てしない遠くを憧れたこともあったでしょう。それは、夕日が花のごとく、美しく燃えるときばかりではありません。灰色の雲が、ものすごく低く飛び、嵐の叫ぶ日もありました。

「正ちゃん、この海の合奏は、ベートーベンのオーケストラに、まさるとも劣らないよ。人間が、いくらまねようたって、自然の音楽には、かなわないからね。」と、兄は、言いました。戦争が、だんだん大きくなって、ついに、兄のところへも召集令が来ました。私は、その日を忘れることができません。今まで、楽しかった、家の中は、たちまち笑いが消えてしまって、

兄は、自分の本箱や、机のひきだしを、片づけ始めました。

「行けば、いつ帰るかわからないから、ハーモニカを正ちゃんに、預かってもらおうかな。」

こう聞くと、私は、兄の気持ちを考えて、自然と涙がわきました。

「兄さんが、帰るまで、なんでも、そのままにしておくよ。」

「いや、もっと戦争が、激しくなれば、この家だって、どうなるかしれんものね。」

兄は、無事で帰れたなら、また勉強を始めるつもりだったのでしょう。英語の辞書も、一緒に渡しました。

しかし、兄は、それぎり帰ってきませんでした。兄の船は、南方へ行ったといううわさでしたが、出発後、なんの便りもなかったのです。

私は、海辺に立って、はるかな水平線を眺めて、ハーモニカを吹きました。入り日の前の空に、さんらんとして、金色のししのたてがみのような雲や、また、真っ赤な花のような雲が、絵模様のように、飛ぶことがありました。兄は、こんなようなたそがれが、大好きであったと思うと、今頃、どこかの島で、この空を見てるのでなからうかと、ひとりで、目の中の曇ることがありました。私は、せめて、この真心の、兄に通ずるようと、ハーモニカを吹いたのでした。

また、嵐の日にも、兄のしたごとく、浜辺へ出て、鳴らしました。しかし、兄のハーモニカが、ここにありながら、それを愛する兄の、いないということは、考えると寂しい限りでした。その翌年の夏には、公報こそ入らなかつたけれど、兄の戦死は、ほぼ確実なものとなりました。ある日、私は、波打ち際で、清ちゃんと遊んでいました。

「波は、生きていますよ。」と、清ちゃんが、言ったので、私は、

「生きていますよ。たましいがあるというの。」と、聞き返しました。

1 【いずく】いずく。どこ。
2 【迷信】はつきりした根拠のない言い伝え。
3 【花のごとく】花のように。
4 【まさるとも劣らない】決して負けていない。
5 【召集令】第二次世界大戦敗戦以前の日本で、国民に兵として軍隊に加わるよう命じた「召集令状」の略。

6 【どうなるかしれん】どうなるかわからない。
7 【それぎり】そのまま。それっきり。
8 【入り日】やがて沈もうとする太陽。夕日。
9 【さんらん】華やかに光り輝く様子。
10 【たそがれ】日が沈み、薄暗くなった頃。夕方。
11 【この真心の、兄に通ずるように】この真心が、兄に通じるように。
12 【公報】官庁が発行する公式の文書。

「うそと思うなら、石を投げてごらん。怒って、大きくなるから。」と、清ちゃんは、不思議なことを言うのです。

私は、石を拾って投げました。続いて、清ちゃんが、投げました。二人のすることを、せせら笑って見ていた、白い波が、だんだん高く頭をもたげて、急に二人の足もとを襲いました。

「ほら、怒った！」と、清ちゃんが、叫びました。

私は、夢中になって、石を拾っては、できるだけ沖へ近づいて投げると、もくら、もくらと、海はふくれ上がり、大波が、私の足をさらおうと、やってきたので、あわてて逃げました。そのとき、砂の上へ置いたハーモニカを持っていつてしまいました。

私は、波が、またハーモニカを返してくれはしまいかと、しばらく立って、待っていたが、それは、ついに無駄でした。

月の明るい晩でした。私は、窓に腰を掛けて、どこかで鳴く虫の、かすかな声を聞いていました。秋の近づくのを感じたのでした。すると、たちまち、ハーモニカの音がしたのでした。

「あれは、誰が吹いているのだろう。」と、今度は、そのほうへ気をとられました。吹いている人は、歩いているのか、その音は、近くなったり、遠くなったりしました。

「兄さんじゃないか。」と、私は、立ち上がりました。あまり、しらが、よく似ていたからです。外へ出てみようとするうちに、ハーモニカの音は、やんでしまいました。

まだ、その疑いの解けぬ、二、三日後のことです。私は、赤く夕日が、海へ沈むのを眺めていました。すると、後ろの砂山の辺りで、ハーモニカの音がしました。その吹き方が、兄そっくりなので、私は、はっとして、このときばかりは、全身が熱くなりました。

「誰だか、見てやろう。」

ただ、むやみとそのほうへ、足に任せて、駆けだしたが、いつしか、音も消えれば、さっきまで、ちらほらしていた、人影まで、どこへやら去って、見えなくなったのです。

私は、家に帰って、このことを母に話しました。

「それは、気のせいです。あまりおまえが、兄さんと思うから。」と、母は、言いました。

しかし、私は、気のせいだとは、信じられませんでした。けれど、それ以上言い合えることは、できませんでした。ところが、なんと驚くことには、今度は渦巻く波の中から、兄の吹く、ハーモニカのしらが聞こえたのです。私は、さっそく、清ちゃんを呼んできました。清ちゃんは、いつになく、真面目くさって、耳を澄ましました。

「きつと、正ちゃんのお魚が、小さな口で吹いているんでないか。」と言いました。

その後も、私は、一人なぎさに立って、ぼんやりと海を眺めることがありました。あるとき、知らない男の人が、私のそばに立って、じっと沖のほうを眺めていました。顔の色は、日に焼けて黒く、その目は、とび出ているようで、いくらか、怖い気がしました。お寺へ行くと、よくこんな形をした、木像の仏様があるのを、私は思い出しました。こちらが、優しくものを言ったら、怒りはしないだろうと、考えたので、

「おじさんは、何を見ているの。」と、聞きました。すると、怒るところか、うちとけて、私を見ながら、

「あちらの島に、まだ残っている、戦友のことを思っていたんだよ。」と、その人は、答えました。

「まだ、帰らないの。」

15 【あまり】あまりにも。
15 【しらが】音楽の調子。

1 【むやみと】よく考えない
てする様子。

11 【なぎさ】海や川の、波が
うち寄せるところ。

18 【戦友】戦場で一緒に敵と
戦った仲間。

「土の中で眠って、永久に帰らないのさ。」

「おじさんは、いつ復員したの。」

私は、すぐに兄のことを思い出さずにいられてませんでした。

「まだ、一月ばかりにしかならない。いくら苦しんでも、こうして、帰られた者は、幸せだが、いつまでたっても、戻らない戦友はかわいそうだ。」

これを聞くと、私は、情け深い人だと思ったから、

「おじさん、僕の兄も戦死したんです。」と言いました。

「やはり、そうか。」と、急に暗い顔になって、うなずきました。いつか、二人は、並び合って、砂の上に腰を下ろし、海のほうを向いていました。

「僕、いつも、ここに立って、兄さんを思うんですよ。」と、私が、言うと、その人は、目を足もとへ落として、やはりうなずくばかりでした。

「人間は死んでも、霊魂は、生きているのではない？」と、私は、不思議なハーモニカの音からおじさんに、こう尋ねたのでした。あるいは、戦地にあって、それを経験したとも、限らないと思ったからです。おじさんは、しばらく、なにか考えているような様子だったが、やがて、顔を上げると、

「それについて、不思議なことがある。」と言いました。

「不思議なことって、どんなこと。」

「幽霊とでも、いうんだらうな。」

「えっ。」と、私は、びっくりしました。

このとき、冷たい風が、海の上から、さっと陸へ向かって、走ったように感じました。

2 【復員】戦争が終わって、兵士たちが軍隊の任務を解かれて家に戻ること。

おじさんは、口を開きました。

「前線へ、伝令にいった兵士が、帰りの山の中で道を迷ってしまった。困っていると、不意に靴音がしたので、まさしく、敵に出会ったと、身がまえすると、思いがけない、親友だったので、二度びっくりした。あまり遅いので、こんなことではないかと迎えにきたよ。さあ、暗くならぬうち、早く行こうと、戦友は、先に立って、よくこんな道を知っているなど思うようなところを歩いた。だが、彼はこのあいだの戦争で死んだのではなかったか気がついたので、休んだら聞こうと思っっているうち、その姿を見失ってしまった。それと同時に、麓のほうで、軍馬のいななきを聞いたというのだ。」と、おじさんは、話しました。

「霊魂が、親友を救ったのですね。」と、私は、その話に感動したのでした。そして、私は、兄の吹く、ハーモニカの音が、この頃、たびたび聞こえると、言いますと、

「きっと、君の兄さんは、家のことを思っでいられるのだろう。」と、おじさんは、答えました。

「そうしたら、どうすればいいの。」と、私は、聞きました。

「せいぜい、兄さんの好きなことをしてあげて、霊魂を慰めるんだね。」と、おじさんは、言いました。

そのことを、私に教えてくれた、おじさんは、どうしたのか、その後再び見ることができませんでした。

私の兄は、なにより平和を愛しました。だから、音楽が好きでした。私は、父に願って、兄の持っていたのと、同じハーモニカを買ってもらいました。そして、それを吹くときには、必ず、兄の気持ちになろうとしました。

私の兄は、自然を愛したし、また、誰に対しても親切で、なにをするにも、優しみの心をもっ

2 【前線】戦場で、敵と直接向かい合っている、いちばん前の辺り。

2 【伝令】おもに軍隊で、命令を伝えること。また、その役目。

7 【麓】山の下の方。山裾。

7 【いななき】馬の鳴き声。

ていました。

私は、海岸へ行くと、まず、兄のしたごとく、砂の上へ腰を下ろしました。そして、ハーモニカを吹きました。このとき、空を飛ぶ雲、打ち寄せる波、しきりと顔へ当たる風、ともどもに、申し合わせたごとくたたずんで、

「聞き覚えのある、懐かしい音だ。」と、言っているようでした。

私は、ますます、兄の目、兄の心をもってきました。すると、彼らは、

「あれを吹くのは、弟か、兄そっくりじゃないか。また、この浜辺へも、昔のような平和が、やってきたな。」と、ささやき合っているのです。

私の真心で、兄のたましいも、初めて、慰められたものか、不思議なハーモニカの音も、それ以来しなくなったのであります。

〈出典 『小川未明童話集』 青空の下の原っぱほか〉（講談社、一九八〇年）

【著者】小川未明（おがわみめい）

一八八二（明治一五）年—一九六一（昭和三六）年

小説家、児童文学作家、新潟県の生まれ。

【著書】『赤い蠟燭と人魚』『月夜とめがね』『赤い船』など

3 【しきりと】ひっきりなし

に。何度も何度も。

3 【ともどもに】「一緒に」。

4 【申し合わせる】話し合いをして、みんなの考えを同じにする。

4 【たたずむ】その場を去りがたい感じて、しばらくじっと立ち止まる。